

グローバル人材育成のための言語学入門 ―日本語篇―

An “Introduction to linguistics” course for the nurturing of global human resources: Japanese language unit

人文社会学部 人間社会学科
日本語教育学教室
ダニエル・ロング

名古屋商科大学 国際学部
グローバル教養学科
甲賀 真広

1. はじめに

筆者らはグローバルな視点から物事を考える人材を養うための言語学入門という教材を構築しようとしています。目指すのは、日本人や日本に留学中の外国人のための10言語の解説です。日本に地理的に近い言語、歴史的に関係の深い言語、現在留学生や日本語学習者が母語としている言語などを選定しています。具体的には英語、中国語、韓国語、ポルトガル語、インドネシア語などを取り上げる予定です。本稿はその端緒としての日本語篇です。日本語ネイティブであっても未習者は知らない、日本語が他の言語と似ているところ、特徴的なところ、相違点と共通点を取り上げます。

2. 日本語はどのような言語か

「日本語ってどんな言語か」と聞かれたらどう答えますか。これは実際に、筆者(甲賀)が外国人の友人に聞かれたことです。彼はサウジアラビア人でした。日本を訪れた経験もなく、日本語に関する知識ありません。ただ、お互いの意思疎通に英語が使えるという状況です。こんな時、あなたならどのように説明しますか。あなたが英語を話せる、話せないは置いておいて、まずは日本語について、日本語で考えてみましょう。

しばしば日本語はSOV型(主語+目的語+動詞、「大谷は(S) ボールを(O) 投げた(V)」)の言語と言われます。これが「日本語の特徴」でしょうか。英語ならOtani(S) threw(V) the ball(O)です。中国語も同じSVO型です。アラビア語は動詞が文頭にくるから、ramaa(V) Utani(S) al kura(O)となります。ハワイ語のKiola 'o Otani i ka pōhiliもVSO型の語順です。一方、韓国語のOtani-neun gong-eul deonjyeossdaは日本語と同じSOVです。モンゴル語もSOV型言語です。このように、あることが「日本語の特徴」かどうかを考えるためには外国語と比較する必要があります。そのためには相手の言語についても色々と教えてもらいたい気もしますが、ここでいくつかの「話し合いのネタ」を取り上げてみます。読者のみなさんの想像力を刺激できれば幸いです。

3. 系統・歴史

言語学者にとって、ある言語の概要を考える時にまず気になることは、その言語のルーツです。人間の家系図が書けるように、言語の系統図も書けます。系統図というと枝分かれした図をイメージすると思いますが、言語もその枝分かれをした結果、いまの言語に行きつくというわけです。

言語というものは常に変化していますが、その細かい変化が積み重なり、数百年経つと別々の方言へも枝分かれしていきます。逆に言えば、現在でこそ東京のことばと大阪のことばは異なりますが、タイムマシーンに乗って千年前や千数百年前に戻ることができたら、当時はそれほど違っていなかったということです。さらに挙げれば、いま東京の人が沖縄の伝統方言を聞いてもまったく理解できないように、違うことばになっています（言語学ではこれは「相互理解」の問題と言います）。しかし、これもタイムマシーンでさらに（例えば2千年前まで）さかのぼると、日本本土と沖縄のことばがもっと似ていた時代にたどりつくと考えられています。

このように現在は、沖縄のことばは東京のことば（標準日本語）と相互理解がありません。そこで、これらを「別の言語」とみなして沖縄のことば「沖縄語」と呼ぶ場合があります。しかし、日本本土の様々な方言と沖縄（琉球）の様々な方言は確実に同じ系統ではあることが分かっているので、「沖縄方言」と表現される場合もあります。2通りの見解があるように、「言語」と「方言」は連続的なもので、その境目がはっきり引けません。ただ言えることは、「違いが大きい」場合は「別の言語」と呼び、「違いが大きい」場合は「方言」と呼ぶことが多いということです。2通りの考え方を紹介しましたが、どこまでの違いを「大きい」と判断するかということも重要な問題です。ですが、実はこの問題については、いまだに意見が分かれています。その判断（どこで線を引くか）が学者によって違うため、沖縄のことばは「日本語の1方言だ」と言う人と、「日本語の姉妹言語だ」と言う人が両方いるのです。

他の言語の場合について少し考えましょう。英語の系統ははっきりしています。英語は千数百年前までドイツ語やオランダ語と同じ言語でした。もっとさかのぼればラテン語などともつながります。オランダ語は英語の「姉妹言語」だとしたら、ラテン語はいとこのような遠い関係にあると言えます。

日本語の遠い親戚は何語なのでしょう。残念ながらその定説はありませんが、有力な説が3つあります。1つはアジア大陸で話されている韓国語やモンゴル語、満洲語などアルタイ語族と呼ばれている言語と同系統であるという「北方説」です（図1）。これらの言語は語順など「文法体系」において日本語と似ています。語順の問題については第5節や最後の「練習」問題でまた考えてみたいと思います。もう1つの説は台湾の原住民の言語（中国語系統ではない言語）やフィリピン、サイパン、グアムなどのオーストロネシア語族の言語と同系統である「南方説」です（図2）。これらの言語とは文法こそ似ていないものの、発音面（下で取り上げる「音韻体系」）では共通点がみられます。3つ目の説は、この両方の言語を話す人々が日本列島で一緒に暮らしていたため、2つの言語がごちゃ混ぜになったという「言語接触起源説」です。



図1 アルタイ語族の分布 (クリスタル 1992: 439)



図2 オーストロネシア語族の分布 (クリスタル 1992: 454)

結論から言えば、考古学的な事実に合うのは最後の説です。例えば次のようなことが考えられます。日本列島で暮らしていた縄文人は南方系の言語（これをオーストロネシア語族と言います）を話していました。時が進み、ある時期になるとアジア大陸から北方系の言語（これはアルタイ語族と呼ばれます）を話していた弥生の人々が日本列島に入り込んできました。縄文人は弥生人の優れた技術（稲作農業、機織りなど）に憧れました。そして、彼らの言語を話そうとします。しかし、不完全な「弥生語」、あるいは「縄文語混じりの弥生語」しか話すことができませんでした。その混交型のことばが長

らく使われ、のちに「日本語」と呼ばれる言語へと進化したのです。「北方説」、「南方説」の両方の共通点を見出せるのは、2つが混交したことが理由として考えられるからで、歴史的な背景から「言語接触説」が支持されるというわけです。

4. 発音

次に、発音について考えてみましょう。現代の日本語は世界的に見ればわりと発音しやすい言語だと言えます。ある言語で区別される音のことを、言語学では「音素」と言います。例えば、「こい（恋、[koi]）」と「ごい（語彙、[goi]）」の違いは /k/ と /g/ ですが、このような /k/ と /g/ という区別される音の最小単位を音素と言うのです。日本語の音素は英語や中国語、韓国語などに比べて数が多くありません。例えば、こういう比較法があります。「英語にあるけど、日本語にはない音素がどれくらいあるか」、そして反対に「日本語にあるけど、英語にない音素はどれくらいあるか」。このように比べれば「日本人にとっての英語の発音の難しさ」と「英語圏の人にとっての日本語の発音の難しさ」を比較することができます。例えば日本語の母音「ア、イ、ウ、エ、オ」はすべて英語にも使われています。一方で、英語には日本語にない母音がたくさんあり、日本人には英語の発音が難しく感じられます。つまり、日本語が世界的に見てわりと発音しやすい言語だというのは、この母音の数が要因となっているわけです。

もう少し言語学的に考えてみましょう。図3に英語の11母音の国際音声記号（IPA）と普通の綴りで表記した単語例を並べました。舌は筋肉のかたまりなので、それを上げることで、口内の空間の形を調整して違う音を作り出します。その舌の上げ具合を縦軸の「高位母音・低位母音」で示しています。横軸の「前舌母音・後舌母音」は舌の前（舌尖）を上げているか、より奥の方を盛り上げているかの違いです。比較対照がしやすいように、図4に日本語の母音の位置づけも示しておきます。なお、日本の伝統的な音声学では、「舌の位置」よりも「口内の空間」に注目しているので、昔から「狭母音・広母音」という用語が使われています。

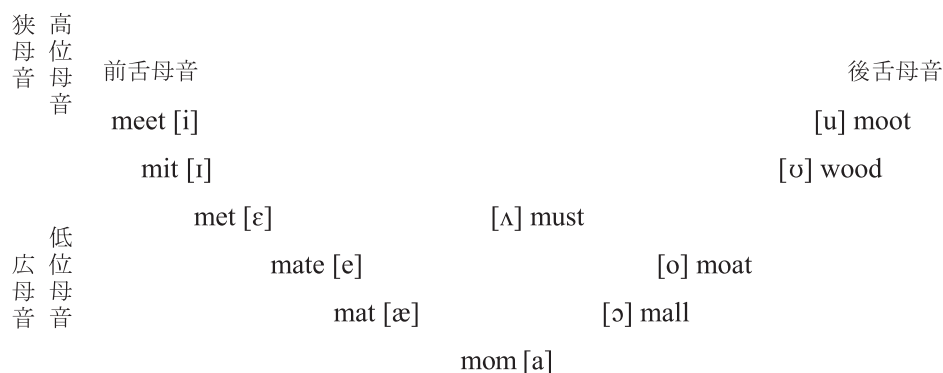


図3 英語の母音体系

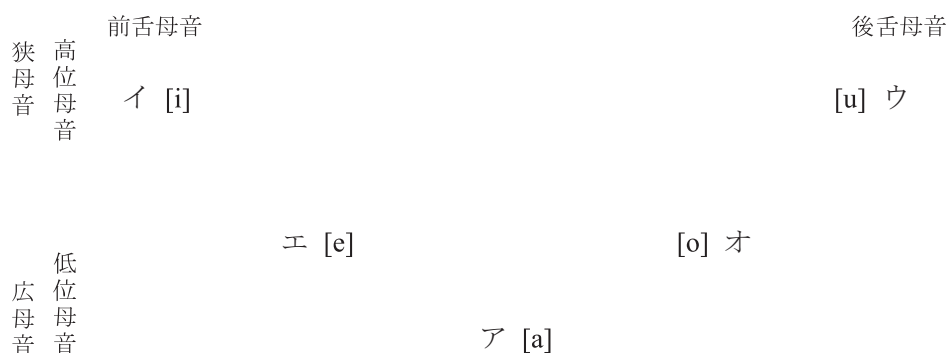


図4 日本語の母音体系

英語の mom, meet, moot, mate, moat にある母音は日本語の「ア、イ、ウ、エ、オ」と同じ音です。したがって、英語圏の人にとって日本語の「あたま、いち、うち、め、おそい」の発音は問題なくできます。一方で、日本人にとって英語で異なる母音が使われる sit [sit] と seat [si:t] の区別が難しく感じられます。それは、日本語にない母音の区別をしなければならないからです。日本語の外来語には“pull”「プル」と“pool”「プール」のように短母音・長母音で区別される単語があります。英語でも後者の母音が長いのは事実ですが、長さで意味を区別しているわけではありません。英語では母音の音価 ([pɒl] に対して [pu:l]) で区別している点には注意が必要です。すなわち、日本語では母音の時間的な長さのみで区別していますが、英語では“pull” [pɒ:l] のように前者の母音を伸ばしても意味に何の影響もなく、“pool”と同音になるわけではありません。日本語の子音には、英語の r と l のような区別はありませんし、英語の二種類の“th”の発音 (this thing) [ðɪs θɪŋ] も日本語にはありません。

しかし、日本語の発音が全部外国人にとって楽かという、そうでもありません。例えば英語圏の人にとって、ラ行の子音を日本語らしく発音するのは困難です。ローマ字では“r”と書いても英語の発音と違うからです。日本語の「つき」と「すき」も区別が難しいもののひとつで、他にも、「つだ」と「すだ」というのは日本では違う名前ですが、この発音の区別も英語圏の人には難しいです。英語圏の人にとって「続き」と「鈴木」などは発音するにしても、聞き分けるにしても練習が必要になります。しかし、(日本人が聞くと驚くかもしれませんが) この「つ」と「す」の区別が難しいのは実は「語頭」だけです。「語中」の場合、「まつ」と「ます」、「こつ」と「こす」、「たつ」と「たす」の区別は同じ英語圏の人でも問題は起こりません。ちなみに、このような「語頭」と「語中」の違いを言語学では「音環境」の違いと言います。皆さんは「環境問題」とよく聞くとありますが、これは別の意味での環境問題なのです。世界中の言語を見ると、日本語のように語頭に ts (「つ」の子音) の発音が来る言語は多くありません。このことが影響して、日本語の「つなみ」が世界中の色々な言語に入っていますが、その多くが「すなみ」と発音されています。英語もその一つです。綴りが tsunami になっていても、ほとんどの場合、発音が sunami に聞こえてしまうわけです。

他の言語についても考えてみましょう。英語の場合は語頭という環境が問題でした。一方で韓国人にとって、語頭でも語中でも、音環境と関係なく「つ」の発音が難しいといわれています。韓国語にはこの子音が存在しないからです。これにより、韓国の人はよっぽど練習しないと「ちゅ」の発音になってしまいます。では、日本人にとって韓国語の発音が楽か、と言うと、そうではありません。日本語にない韓国語の子音がたくさんあるからです。日本人が韓国語を勉強する時に発音が難しいという話をよく聞きますが、これはその子音と母音の多さが原因です。例えば日本人が聞くと同じ「タル」に聞こえてしまう3つの単語があります。韓国語では3種類の違うtで発音し分けています。ハングルで表せば文字も違うことがわかりますが、普通、話している時に文字は見えないので、聞き分ける必要があります。tを発音する時に空気が多く出る「激音」(탈) [tʰal] は「仮面」という意味になります。tを発音する時に喉を緊張させて発音する「濃音」(달) [tʰal] は「娘」という意味になります。いわゆる「普通のt」と言われる「平音」(달) [tal] は「月」の意味になります。ちなみに、韓国語ではこのような「3項対立」はkやpなど、他の子音にも見られます。この点に限って言えば、「日本語の発音よりも韓国語の発音が難しい」と言えます。

日本語に話を戻しましょう。実は「日本語の音素」は子音と母音だけでは終わらないというのもポイントです。その1つ目が「促音」という概念です。文字で表せば「っ」にあたります。これは英語、韓国語、中国語、インドネシア語など、たくさんの言語を母語とする人にとって、厄介な発音です。日本語では促音があるかないかによって、意味が全く異なるという特徴があり、「かた(肩)」と「かった(買った)」、「いしょ(遺書)」と「いっしょ(一緒)」、「やかい(夜会)」と「やっかい(厄介)」はまったく違う意味になります。日本語に慣れていない外国人がこれらを聞き分けようとしても、発音し分けようとしても非常に厄介なのです。

また、母音の長短によって意味が区別されるのも日本語の特徴と言えます。「おばさん」と「おばあさん」、「とった(取った)」と「とおった(通った)」、「じょせい(女性)」と「じょうせい(情勢)」など、母音を伸ばすか伸ばさないかによってまったく違う意味になります。世界的にみて母音の長短によって意味を区別する言語は日本語だけではありませんが、少なくともここまで触れた言語にはない特徴なのです。日本語を勉強する時に、多くの外国人を悩ませる発音の特徴と言えるでしょう。

「日本語はどんな言語か」という質問に答える要素の一つとして、「発音」について考えてきました。これは言語学では「音韻体系」と呼ばれます。多くの言語と日本語の音韻体系を比較することによって、日本語の発音面での特徴の一端がみえてきたのではないのでしょうか。

5. 借用語

もう一つ、言語を比べる時に面白いのは、「借用語」というものです。日本語で言う「外来語」がその借用語にあたりますが、世界中で「X語からY語に入った単語」は全てこのように呼ばれています。上で話していた音素の問題やのちに取り上げる語順の問

題は専門的になりがちですが、借用語は誰でも関心を持てるとつつきやすい課題です。

例えば、上で述べたように世界中の多くの言語には日本語の「津波」が借用語として使われています。外国出身の人に会った時にその人の言語に関する知識がほとんど皆無である場合にも、借用語のネタを持ち出せば共通の課題が見つかるかもしれません。インドネシアの人に会った時、インドネシア語のことを知らないから話のネタがないと思うかもしれませんが、実はインドネシア語起源の単語を皆さんは既に知っているのです。それが「オランウータン」です。「オランウータン」という動物は誰しも知っていますが、その名称はインドネシア語から入った借用語です。なかには、元の意味「森の人」というのも聞いたことがある人もいるかもしれません。日本語に取り込まれたインドネシア語があるという事実も十分面白いですが、言語学的にもっと面白いのはその語順です。「オラン」は「人」を意味し、「ウータン」は「森」を意味します。つまり日本語とは逆の語順なのです。他の例もみてみましょう。インドネシア料理で最も有名なものの1つに「ナシゴレン」があります。日本で言えば「焼きめし」に当たる料理です。これも「ナシ」は「めし、ごはん」で「ゴレン」は「焼く」ことなので、直訳すると「めしやき」になります。これも日本語とは逆の語順なのです。このように1つでも借用語を知っていれば、話のタネになりますし、のちに取り上げる語順という話題にもつながる場合があります。

気づかれにくい借用語もあります。これは少しマニアックな話題ですが、知っておくと便利なトリビア的な豆知識にもなります。しかも、元の意味と借用語として意味がどう違うかなど、「意味変化」といった話題にも広がる可能性も秘めています。一緒に勉強していきましょう。

外来語と言えば、普通、グルメやメッセージのようにカタカナで表記されます。そのこともあって、誰でも外来語だと意識しています。一方で、「天ぷら」は平仮名や漢字で書かれることが一般的で、むしろカタカナ表記はほとんどみられません。このことも影響し、外来語だとあまり意識されていないのです。この起源については諸説ありますが、ポルトガル語に由来するというのが有力な起源説です。日本にはポルトガル語を母語とするブラジル出身の人々が多く住んでいるので、彼らにその元の意味や発音をぜひ尋ねてみてください。意味の違いに驚くことになるかもしれません。

世界の言語にある借用語にも目を向けてみましょう。現在の英語には **head honcho** というよく聞かれる表現があります。「トップな人、実力者」といった意味ですが、スラング的な響きが強く、「一番偉いやつ」といったニュアンスを持っています。これが実は日本語の「班長」に由来しています。文献を通じて英語に入ったものではなく、話し言葉を通じて入ったので、日本語とは異なるつづりが使われています。日本語でいわゆる「ヘボン式」ローマ字では **hanchō** と表記されるでしょう。しかし、「耳から入った知識」であるがゆえに、英語では **honcho** と表記されています。なぜこのようになっていのでしょうか。アメリカ英語の「暑い」を意味する **hot** は、**o** という綴りでも実際の発音はアに近い音です。**honcho** が **a** ではなく **o** と表記されているのは、これと同じ発

想です。つまり、『班長』の『はん』は hot の母音と同じ（近い）音です。だから表記は honcho が適切だろう」と推測されたわけです。これらを国際音声記号（IPA）で表記すると [hat] と [hantʃo] のようになります。

英語でビル・ゲイツのような起業家のことを business tycoon や American tycoons と呼ばれているのを聞いたことはあるでしょうか。tycoon [taikun] という綴りが独特ですが、「タイクン」と発音されます。これも実は日本語起源の借用語です。19 世紀の黒船が来航した時代に英語に借用されました。これはヘボン式ローマ字が発案される前の時代です。この時代から現代にかけて日本語も色々と変化したため、その起源語自体も日本語では最早「死語」となっていますが、当時の日本では「大君」は天皇を指していました。ところが、日本社会を知らないペリーなどは天皇という概念がなく、天皇は偉い人（陰の権力者）ではあるものの、真の権力者は将軍だと考えました。そこから転じて、アメリカの大統領つまり真の権力者と対峙する石油王や鉄鋼王の大金持ちが陰の権力者だという発想から、後者のことを American tycoons と表現するようになりました。

日本人は「外から来た」外来語の話題をよくしますが、このように「日本語から外に行った」借用語（これを「外行語」と呼ぶ学者もいる）にも非常に興味深い言語現象が見られます。

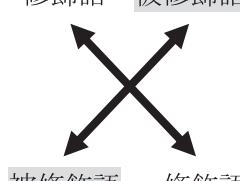
6. 語順

言語を比べる時に、奥深く、とっつきやすいネタの一つに語順があります。すでに少し触れていますが、「語順」と聞いてすぐ思い浮かぶのは「主語・目的語・動詞」のような語順のことかもしれません。主語は英語で subject、目的語は object、動詞は verb なので、これらの頭文字をとって上でみたように「SVO 言語」、「SOV 言語」などと言います。

しかし、「語順」というのはこれだけではありません。上でも「オランウータン」と「森の人」の語順の違いについて触れました。日本語や英語、中国語などでは形容詞が名詞の前に来ますが、インドネシア語やフランス語では逆です。形容詞だけではなく、「焼き飯」、「森の人」のような表現でも「修飾語・被修飾語」の語順となります。日本語や英語は「赤ワイン」red wine となりますが、フランス語は逆で vin rouge（ワイン 赤）となります。上で「奥が深い」と言ったのは、こうした「原則」とは逆の語順になっている例も見つかるからです。これらは「例外」ではなく、「細かい規則」と考えた方が良さそうです。例えば、日本語で「安い旅館」でも「小さな旅館」でも「温泉旅館」でも全て「旅館」の一種です。つまり「旅館」が被修飾語です。ところが、「旅館」が「ホテル」に変わると「ホテルオークラ」や「ホテルニューオータニ」のように被修飾語が先に来る名称が目立ちます。これは実は「例外」ではなく、「ホテル」がフランス語起源の借用語であるがゆえに、フランス語の語順もそのまま日本語に取り入れている例となっています。

表1 「修飾語・被修飾語」語順の言語比較

日本語	赤い	ワイン	修飾語	被修飾語
英語	red	wine		
フランス語	vin	rouge		
インドネシア語	orang	utan	被修飾語	修飾語



「修飾語・被修飾語」の語順に関する細かい規則は他にもあります。日本語の場合、「大きさ、色、特徴」などの表現は名詞（被修飾語）の前に来ますが、「数」の表現は前に来る場合と後に来る場合の両方あります。数と関係のないものは「若い学生」、「中国語を学んでいる学生」、「立派な学生」、「ベジタリアンの学生」などとなりますが、「4人」の場合は、「学生4人が図書館に入った」と言う場合と「4人の学生が図書館に入った」と言う場合が両方あります。

インドネシア語でも「数」は、形容詞など他の修飾語の場合とは語順が異なります。上で紹介した「オランウータン」の元の意味を覚えているでしょうか。orang は「人」で、hutan が「森」です（複合語になったら語頭の h が落ちた）。「日本人」は orang Jepang になります。「日本の言語を勉強している人」は orang belajar bahasa Jepang です。表2で両言語の違いが分かるように、日本語の単語とそれぞれに対応するインドネシア語の単語に番号を振りました。参考までに英語も入れました。これを見ると、真逆になっている様子がよく分かります。またインドネシア語では、「細い人」や「賢い人」は orang kurus や orang pintar になりますが、「数」になると語順が反対になり、「3人の人」、「3人の学生」は tiga orang になります。他にも、「3冊の本」や「3つの大学」は tiga buku や tiga universitas になります。

表2 日本語からみたインドネシア語 orang belajar bahasa Jepang の語順

日本語の単語	日本の	言語を	勉強している	人
日本語の語順	1	2	3	4
インドネシア語の単語	orang	belajar	bahasa	Jepang
インドネシア語の語順	4	3	2	1
英語の単語	people	studying	Japanese	(language)
英語の語順	4	3	1	2

今度、外国の人に会って「日本語ってどんな言語か」と聞かれたらこのような特徴を思い出しながら、日本語について話すことができるでしょう。あるいは日本語が話せる外国人に会ったら、逆にその人の言語について色々と質問することができます。

本稿の続編として多数の言語を取り上げる予定です。それぞれについて勉強しながら「この点に関して日本語と同じだろうか、どう違うのだろうか」と具体的に想像してみ

てください。「もっと知りたい人のために」関連文献にいくつかの文献を入れました。高見他（2019）は日本語教育の本ではありますが、はじめて外国人に日本語を教えるための勉強をする人向けに書かれているという意味では、日本語を知るために参考になると思います。

練習問題

練習 1 オンライン上で日本語から他の言語に単語や文を簡単に翻訳することができます。それを使って「太郎が花子に花をあげた」「ペンで字を大きく書いてください」「本を読んでいる学生が2人いる」など様々な文法事項（授受表現、依頼文、連体修飾節など）を日本語から韓国語、日本語からモンゴル語に翻訳し、その語順を比較してみましょう。

練習 2 日本人にとって英語の L と R の発音や聞き分けが難しいことはよく知られています。これらは子音の問題ですが、では、日本人にとって発音や聞き分けが難しい母音はどれだと思いますか。図 3 と図 4 を参考に考えてみてください。また、オンライン上でその母音が使われる単語を探し、聞いてみてください。

練習 3 外来語のことも調べよう。英語では lock と rock は発音上区別されますが、日本語になると同じ「ロック」になってしまい二つが同音異義語になります。これらの原語（英語）の発音はどうなっていたか調べてみよう。アンダースロー、スローライフ、ポテトチップス、チップ、高速バス、バスタオル、ベリーグッド、ストロベリー、ベリーダンス、リストバンド、買い物リスト、スケートリンク、リンク先、マウスピース、ミッキーマウス、駅のホーム、老人ホーム、ブラックホール、大ホール、ファーストフード、ファーストクラス、ジャンクフード、洋服のフード。

練習 4 外来語は英語だけではなくありません。それぞれの起源言語について考えてみましょう。いずれの日本語もすべて外来語です。それぞれの単語は何語に由来するかを調べましょう。

日本語

ズボン
インテリ
オットセイ
オルゴール
カステラ
カルタ
カンパ

起源言語

(例) ポルトガル語

スコップ
 セイウチ
 トーチカ
 トナカイ
 ノルマ
 パン
 ポンプ
 ミーラ
 モルモット
 ラッコ
 ランドセル
 レッテル

練習 5 沖縄に行けば方言が入っている看板類をよく見かけます。次の写真にみられる語句をみて、標準語の何に当たるか想像してみてください。年々、沖縄方言のオンライン情報が増えているので、想像に限界を感じたら検索してみてください。ちなみに、同じ沖縄方言でも地域などによる細かい変異（ミクロ・バリエーション）も見られます。標準日本語とは発音が少し違う「同根語」もあれば、「ていだ」のように語源が異なる単語もあるので、考えてみてください。



沖縄方言(琉球語)

標準日本語

でいだ
 がんじゅう
 まちぐわ
 まむいんどお
 しまんちゅ
 たびんちゅ

にふえーでーびる
またんめんそーりよ
またんめんそーれ

【参考文献】

クリスタル、デイヴィッド・風間喜代三・長谷川欣佑監訳（1992）『言語学百科事典』
大修館

高見澤孟（監修）高見澤孟・伊藤博文・ハント蔭山裕子・池田悠子・西川寿美・恩村由
香子・新山忠和・林千賀（2019）『新・はじめての日本語教育 基本用語辞典 増補改訂
版』アスク出版